

声が、聞こえました。

そこは、とても暗いところでした。

小さな光が、遙か遠くにあるだけでした。

木の葉がさわさわと鳴る音が聞こえます。

茜は縁側でぐぐーっと伸びをしました。

おばあちゃんに着せてもらったばかりの甚平の袖がひらひらと風に揺れます。夜の風が涼しくて、夜もむしむしと暑い茜の家とは大違いです。

「茜ちゃん、西瓜切れたわよ。暁ちゃんと運んでちょうだい」

台所からおばあちゃんが呼ぶ声がしました。

茜は弟の暁と一緒に田舎のおばあちゃんの家にいるのです。お父さんとお母さんは来ていません。二人だけのお泊まり旅行です。

はあーい、と返事をし、茜はひよんと勢いをつけて立ち上がって、台所に駆け出しました。

「おばあちゃん、アカネ来たよー」

茜が声をかけると、おばあちゃんは振り向いて、よしよしと茜の頭をなでました。

「茜ちゃん、一番乗りよ。はい、西瓜。でも、暁ちゃんは？」

「アキラ？」

茜は首をかしげました。

「アカネ、見てないよ。寝てるんじゃない？ あっ！ じゃあ、じゃあさ、おばあちゃん。

アカネ、アキラのスイカも食べていいよね？ ね！」

「だめよ」

おばあちゃんは優しくそう言って、茜の手から西瓜がのったお皿を取りました。むうと茜は頬をふくらませましたが、おばあちゃんは論ずように続けます。

「これはおばあちゃんが持つていくから、茜ちゃんは暁ちゃんをつれていらっしやい。三人で食べましょう」

「……はぁーい」

おばあちゃんは茜や暁に甘いけど、にこにこ笑顔で言ったことは絶対に変えません。頑固で真っ直ぐなおばあちゃんなのです。

茜は渋々頷きました。

「アーキーラー、ドーコー」

大声で呼びながら襖を開けていくと、一番奥の茜と暁が使っている部屋で座布団が小さな山のようになっていました。

茜はずんずんと部屋を横断し、えいやつと座布団の山を崩しました。

「アキラ、みーっけ！」

座布団の山の真ん中には、うつらうつらしている暁がいました。茜は暁の腕を掴み、ぐいぐいと引きます。

「……あかね、ちゃん？」

「そう。はやく、お、き、て！ スイカ、おばあちゃんが切ってくれたんだから」

暁は少し寝ぼけているようでした。茜に引っ張られるまま、のろのろと立ち上がり、目をこすっています。

「あかねちゃん、ぼく、よんだ？」

暁はどこか不安そうに茜を見つめます。なんでアキラはいつもこう、訳のわからないことを言うのだろう、と茜は思いました。

「呼んだよ。何回も！ もーじゃあ、アキラはスイカいらなんだね。いいいいよ、ずつと寝てて。アカネがもらつちやうから」

イライラした茜が思わず大きな声でそう言うと、暁はきよとした顔をし、首をぶんぶん振りました。

「すいか、たべたい」

茜は心の中でちよつとだけ、ちえつ、と思いました。

「じゃあ、早く行こう。おばあちゃん、待つてるよ」

でも、そんなことは顔に出さず、お姉さんぶってそう言い、暁の手を引いて縁側に向かいました。

「おいしかったー！」

赤いところがすっかりなくなった西瓜の皮をお皿におきながら、茜は叫びました。

「あらあら、と笑いながらおばあちゃんが茜と暁の口元についた西瓜の汁をふいてくれます。」

「ありがとうねえ。お隣さんの畑の西瓜なの。茜と暁が喜んでたって聞いたら、きつと喜ぶわね」

おばあちゃんは布巾をお盆に戻しながら、ふふつと笑います。

その時、茜は『イイコト』を思いつきました。

「あ、ねえ、おばあちゃん。オトナリサンって、原っぱの近くのおうちだよね？」

「ええ、そうよ」

どうしたの？ という顔でおばあちゃんは答えます。

「じゃあアカネ、おれいする！」

茜はびよんと立ち上がり、右手をはい！ とあげて宣言しました。

「お礼？」

おばあちゃんは目を丸くしています。

「おれい！ アカネとアキラでありがとうってオトナリサンに言うの」

「でもね、茜ちゃん。もう暗いし危ないわ。それにお隣さんも寝ているかもしれないし。明日にしましょう」

「じゃ、じゃあ！ おてがみ書く！ それなら、オトナリサン寝ててもへイキだよ。ね、

アカネ、アキラとポストに入れてくるよ」

「だめよ。やつぱり危ないわ。明日、三人で行きましょう」

おばあちゃんはあのにこにこ笑顔を作ろうとします。茜は慌てました。

「まつ、まつて！ 夜じゃな——」

あつ、と思つて茜は口を押さえました。けれども、時すでに遅しでした。おばあちゃんが眉をよせます。

「夜じゃないと？」

うつと茜は言葉に詰まり、必死に考えました。本当は内緒の方がいいのですが、言ってしまったほうがいいのかもありません。

そこで、茜はおばあちゃんの手を引いて暁から見えない所まで連れて行き、足を止めま

した。

「いい、おばあちゃん。ゼツタイ、ゼーつたい、アキラにはないしよだからね！」

茜は目一杯背伸びをして、おばあちゃんの耳元に手を伸ばします。

「あのね、おばあちゃん。むかし、オトナリサンの家の近くの原っぱで、アカネたちお星さま見たでしょ。でね、アキラは前来たときのことね、ちっちゃかったから覚えてないんだよ。だから、アカネが教えてあげるの。ね、いいでしょ？」

いつも、ほとんど表情の動かない暁の驚いた顔、絶対見たい、と茜は思います。

おばあちゃんは考えるように腕をくみます。

「それなら確かに夜じゃないとダメだけど。でも、やっぱり危ないのじゃないかしら。いくら田舎って言ってもねえ。迷子になるかもしれないし。おばあちゃんと一緒じゃダメなのかしら」

「アカネ、大丈夫だよ！ ちゃんと、道も覚えてるよ。それに、アカネもう小学生のお姉さんになったんだよ。アキラをびつくりさせるの！」

おばあちゃんはふっと笑いました。しょうがないわね、と茜の頭をなでます。

「そうよね、もう大きなお姉さんのものね。お姉さんになんてなりたくなかった、って言ってた茜ちゃんとは違うのよね」

「おばあちゃん！ ま、まえのことはいいでしょ！」

「わかってるわよ。茜ちゃんには負けたわ」

「じゃあ、」

「ええ、行ってらっしゃい。但し、夜は冷えるからちゃんと上着も着ていくことと、防犯ベルを持つこと。約束できる？ 約束したら、お手紙の用意をするわ」

しゃがんで茜と目線を合わせたおばあちゃんが小指を差し出します。

「うん、約束する。ありがとう、おばあちゃん！」

元氣よく茜はそう答えました。

「アキラ？」

茜は座布団の山をのぞき込むように崩しました。中には西瓜の時と同じように暁がいました。

「またこんなとこに隠れてえ。早く行くよ」

茜は暁の腕をつかんで引つ張ります。暁はぼかんとした顔をしています。

「オトナリサンにおれい持ってくるの。ほら、これ」

じゃーん、と茜はさつき書いたばかりの手紙を突き出します。

「わかった？」

暁は考えこむように俯きました。何か気になることがあるようでした。でも、暁は普段から無口な子です。黙り込むのはいつものこと、気にしてはいられません。

茜は沈黙を肯定と受け取って、返事を聞かずに暁を引っ張っておばあちゃんの家を出ました。

かこんと手紙がポストの中に落ちる音が心地良く響きました。

「よしっ！ ニンムカンリョー、だね、アキラ」

茜は暁に振り向きました。暁はじっと地面を見つめたままです。おばあちゃんの家を出た時から黙りこんでいるのです。茜は口をとがらせました。

「アキラはいつつも、だんまりなんだからあ。ほら、帰りはあっちの道だからね」

暁の手を引いて茜は林の小道を出ようとします。すると、ようやく暁が顔を上げました。

「あかねちゃん、かえらないの？」

「帰るよ。そう言ってるじゃん」

「でも、ぼく、そっちは——」

暁が言い終わるのを待たず、茜は走り出しました。林道を抜けて、原っぱに出ます。

空が開け、輝く星空が目飛び込みます。

満点の星と美しい天の川が。

相変わらずの美しさに、茜は暁の手を離し、しばらく見惚れました。これならば、あの暁だって普通の子のように驚くはずです。

自分がこの夜空の発見者であるような誇らしきで一杯になりながら、茜は暁を振り返ります。

「ついたよ。キレイでしょう。ね、アキラ驚い——アキラ？」

暁はうづくまって耳をふさいでいました。

「アキラ？ どうしたの？」

「ききたくない……ききたくない……」

「アキラ？」

「やめて——とまってよお……」

おろおろと尋ねる茜の声は、暁には届いていないようでした。

何かを拒絶するように、頭をふるふると震わせるだけです。

「アキラ!!」

訳がわからなくて、茜は暁を怒鳴りつけました。

「アカネの話、ちゃんと聞いて！ 何言ってるのかアカネ全然わかんない」

びくんと暁は顔を上げます。

その顔は、涙にぬれていました。

「サミシイって、いうんだ。サミシイ、サミシイ、ってずっと。いっぱい。まっくらで、

サミシイって——」

茜は怖くなりました。何が怖いのか、よくわかりません。涼しいと感じていた風を、寒いと感じます。この、三つ違いの弟は一体何を言おうとしているのでしょうか。

「だれ、が」

暁は星の輝く夜空を指差しました。

茜は何も言えません。暁が泣く音だけが原っぱに響きました。

茜は、弟が苦手でした。

無口で、何を考えているのかわからなくて、いつも、遠くを見ているから。茜には見えない何かを。

だから、とっさに思ったことは、弟がおかしくなってしまった、ということでした。恥ずかしくて、悲しいと感じました。

でも、あまりに暁が泣くから。

暁の声が本当に、『独り』だったから。

今は、泣きだしてしまいそうなくらい、いいえ、泣くこともできないくらいの悲しい気持ちで一杯でした。

それは同じ『悲しい』でも、もっと怖くて、淋しい、『悲しい』でした。

空はとても暗い青でした。森は真っ暗で、木の葉の鳴る音も、とても遠くに聞こえます。

昔見たあの空は、あの時の森は、もっとずっと優しく、暖かくて、身近だったはずなのに、今はずいぶんと違って見えます。

どうして、怖いと思わなかったのが、不思議なくらいでした。

独りぼっちになった気がしました。誰もいない、真っ暗な場所にたった一人であつてい
るような。満点の星たちの光ですら、今にも暗闇に呑み込まれてしまいそうなのです。ち
っぽけな茜ならなおさらです。

本当に、茜が怖かったのはこれだったのかも知れません。

暁は、茜に見えないものを見ている気がしたから。

茜が気付かないでいた、怖くて、淋しくて、悲しいことを知ることになってしまいう気が
していたから。

だから、茜は弟のことをずっと苦手だったのです。

」

小さな呟きに茜は我にかえりました。俯いた暁の声です。

「——けて」

「アキ、ラ？」

暁は茜を見上げます。

手は茜の手を握り、目と目が合いました。

「あかねちゃん、たすけて……！」

その声を聞いた時、茜は初めて気付きました。

どうして暁は何も感じない、と思っていたのだろう、と茜は思いました。どうして気付
いてあげられなかったんだろう、と。

暁の手は、震えていました。

暁は、茜よりも三つも年下なのです。

何も感じないわけがなかったのに。

茜は確かに暁が苦手で、暁をよくわかっているわけではありません。でも、暁はいつだ
って、なんでもかんでも抱え込んでしまう、ということくらい知っていたはずでした。

ずっと一緒にいる、家族なのですから。

『もう大きなお姉さんなのだね』

おばあちゃんの言葉が茜に力をくれます。

「……大丈夫。一人じゃないよ」

茜は少しだけ掠れた、でもはっきりとした声で言いました。もう悲しくはありませんで

した。

繋いだ手からは暁の温かい体温が伝わってきます。

茜には、暁がいます。それに、今はしっかりと思い描けます。昔見た優しい空を。どうして淋しくなかったのか、思い出すことが出来ます。

「あのねアキラ、前ね、アキラがもつと小さかったころ、みんなでここに来ただよ」

あの日、この原っぱに茜を連れてきたのはおばあちゃんでした。お姉さんになんてなりたくなかった、と泣く茜を泣き止ませるために。

「その時ね、おばあちゃんが言ってたんだよ。ここで見えるお星さまはみんなアカネたちと家族だ、って」

「カゾク？」

暁が不思議そうに聞き返します。その目にはもう涙はありません。

茜は微笑みました。

「そう、家族。天の川のお星さまも、アカネたちの地球も、みんなギンガケイの家族なんだ、って」

こんなにたくさん家族がいて、どうして淋しいことがあるの、とおばあちゃんは言いました。暁が生まれて——家族が増えて、何も悲しいことなんてないでしょう、と。

「だから、お星さまに伝えて。ひとりじゃないよ、って」

「——うん」

暁は肯いて空を見上げました。きっと茜にはよくわからない方法で星と会話しているでしょう。

「なんて言ってる？」

「ありがとう、だって。もう、さびしくないって。——ありがとう、あかねちゃん」

暁は笑っていました。茜は嬉しくなりました。でも、少しだけすましてこう言いました。

「どーいたしました」

原っぱを優しい夏の風が吹き抜け、空にはたくさん星が瞬いています。そこには悲しいことなんて何一つありませんでした。